

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520974

研究課題名(和文) 民俗信仰の再文脈化をめぐるダイナミズム

研究課題名(英文) The dynamics of folk beliefs that have acquired new contexts.

研究代表者

山田 巖子 (Yamada, Itsuko)

弘前大学・人文学部・教授

研究者番号：20344583

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円、(間接経費) 1,230,000円

研究成果の概要(和文)：東北と北海道における信仰調査のうち、青森県津軽地方と北海道に見られる「授かるオシラサマ」については日本民俗学会と日本昔話学会で研究発表と招待講演を行った。福島県会津地方のオシンメイサマについては1970年代～80年代の手書きの調査資料、孔版の記録、写真などの提供を受け、それらをデジタル化し、原資料の復刻版を作成した。刊行までには調査者による加筆訂正などが必要である。岩手県、青森県のオシラ神信仰とその置かれている文脈を示す映像資料「オシラ神信仰の『現在』」とその映像解説を作成した。神楽衆、民間巫者、寺院、集落、博物館、観光施設など、オシラ神に関与する主体の違いを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Research was done in the Tohoku area and Hokkaido regarding folk beliefs in that area. I was invited to do a lecture and presentation at the Japan Society for Folktales and the Folklore Society of Japan about "The Endowment Oshirasama" which is found in the Tsugaru Area of Aomori Prefecture and Hokkaido.

Regarding Oshirasama in the Aizu Area in Fukushima Prefecture, I received hand-written records and stencil printing plates from the 1970's to the 80's and photographs etc. We digitalized them, and made a facsimile edition of the original material.

We made a video image on the "present" of the Oshirasama folk belief "which showed the Oshirasama beliefs and their contexts from Iwate Prefecture and Aomori Prefecture. I published a book that explained the video. I clarified the difference between the ways in which 1.the members of Kagura 2.the maidens,3.the Buddhist temple, the peoples of the village,5.museums,and 6.tourist facilities, relate to beliefs, within the video image materials.

研究分野：文化人類学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：オシラサマ 民俗信仰 再文脈化 信仰の動態 民間宗教者

## 1. 研究開始当初の背景

オシラ神信仰の研究は、楠正弘の『庶民信仰の世界』(1984年)以降、大きな理論上の進展はないままに、歴史還元論的な起源論や意味論が、「地域おこし」の要請とあいまって新たに展開されるか、個別具体的な事例研究が、在野の研究者や地域の博物館によって黙々と積み上げられているという状況にあった。

研究代表者は、2002年から、青森県下で展開するオシラ神信仰を定点観測し、共時的な動態把握をめざしてきた。その際に注目してきたのは、オシラ神をとりまく「文脈」の把握であった。

山田巖子(巖子)「夏泊半島における民間宗教者 移動と役割」(平成15年~17年度科学研究補助金基盤研究(C))『半島空間における民俗宗教の動態に関する研究』研究代表者 諸岡道比古(2006年)において、青森県の津軽地方と南部地方の境に位置する夏泊半島の調査を行った。海路による下北半島との交流から、陸路による青森市との交流へと移行してゆく過程で、この地域の信仰も、下北地方の民間宗教者への依存から、青森市を始めとした、津軽地方の民間宗教者への依存へと移っていったことを確認した。

このような動きの中で、1950年代後半頃から、古くからあるオシラ神を弘前市の真言宗寺院久渡寺の教えに沿った、新たな御神体に替えたり、オシラ神を新たに「授かる」という現象がおこったりしていた。この「授かる」人々の談話の分析から、これらの人々は、特殊な感覚・経験を「授かる」と表現し、オシラ神だけではなく、竜神や稲荷など様々な神を「授かる」人々であることを明らかにした。このような人々が、ある時は地域の外の寺社と結びつき、あるときは民間宗教者と結びついて、常にオシラ神に「新たな意味」を与え、そのコミュニケーションを通じた解釈活動によって信仰を活性化していることを示した。

次に、弘前大学の文化財論ゼミナールによるオシラ神の物質調査の成果(関根達人編『津軽車力 高山稲荷の民間信仰品』2004年 弘前大学文化財論ゼミナール)と、筆者による、春のオシラ講(託宣行事) 寺社巡拝行事の調査・分析から、津軽のオシラ神信仰が、明治以降、寺社への巡拝行事と結びつき、民間巫者と寺社の役割分担によって制度的に安定した場所にあることを示した(「津軽におけるオシラサマ信仰の展開 / The Evolution of Oshirasama Folk Beliefs in the Tsugaru Region」ハンナ・ジョイ・サワダ、北原かな子編訳『日本語と英語で読む津軽学入門 / An Introduction to TSUGARU STUDIES in Japanese and English』2006年 弘前大学出版会)。

平成19年度~21年度科学研究費補助金(基盤研究(C))に採択された「第二次世

界大戦下のオシラサマ信仰と民間巫者」(研究代表 山田巖子(巖子))では、近代以降の民間巫者とオシラ神信仰の展開を跡づけながら、第二次世界大戦中におこった「変化」を追い、あわせて、このような「非常時」のフォークロアが、戦後の信仰や民間巫者のあり方とどう関わったのかを問うた。

第二次世界大戦中に、オシラ神は弾除けの御利益を期待され、イタコは、「英霊」の口寄せを要請された。「英霊」の口寄せは、新たに作りだされたものというよりは、従来の津軽のイタコが行う、幼年者や未婚者への丁寧な口寄せの作法が流用されたものと考えられる。

戦後、この動きは沈静下したかに見えたが、1970年代において、恐山のイタコがメディアを通して全国に知られるようになると、「地域」を超えた人々から「英霊」の口寄せが新たに要請されていった。

この調査は、一見、古いものの連続のように見えるものが、短いタイム・スパンで持つ意味を文脈ごとに変化させていった結果生じたものであり、ローカルなものが地域の文脈を超えてゆくことで、新たな文脈を獲得していった過程を示すものであった。

この科研に研究協力者として参加している岩崎純愛は、「弘前市周辺のオシラサマ信仰の現在 経験と解釈をめぐる」(青森県民俗の会編・発行『青森県の民俗』第8号、2008年)を発表した。この論稿では、津軽のオシラ講に集まる参拝者の談話と行為を分析し、参拝者のオシラ神に対する解釈のゆらぎや幅を示した。この研究は、信仰者間で矛盾する神観念を持ちながらも、互いにすりあわせることをしないままに、統一的な「場」を持つ信仰のあり方を示したものといえる。

また、同じくこの科研に研究協力者として参加している増子美緒は、「オシラサマ信仰における地域的展開の諸相 近代北海道を事例として」(国際日本学研究会編・発行『文化 / 批評』創刊号 2009年)を発表し、北海道道南地域に新たに広がるオシラ神信仰の共時的な動態を示した。

研究代表者の所属する弘前大学文化財論講座や青森県民俗の会でも、青森県の民間信仰の総体からオシラ神を考える研究が続けられてきた。そこでは、青森県南部地方における子安信仰とオシラ神信仰の混淆、津軽地方における「アソバセル」(移動させる)屋敷神(屋外神)とオシラ神(屋内神)の信仰の交錯など新たな論点が提出されてきた(後者については、安藤祐希「家の神の共同性 津軽における屋内神 / 屋外神をめぐる」東北民俗の会編・発行『東北民俗』44 輯 2010年6月 を参照のこと)。

また、青森県では『青森県史 民俗編』の刊行が積み重ねられ、青森県民俗の会の大湯卓二が、民俗の総合調査の中で、下北、南部、津軽といった地域差を視野に入れたオシラサマ調査を継続して行ってきた。この中には

「異形のオシラサマ」や「津軽海峡を越えたオシラサマ」「授かるオシラサマ」などの重要な視点が示されていった。

これらの成果が積み上げられてゆく中で、個別研究をつないでいく新たな視点が必要であると考えた。

2009年9月22日、23日には青森県民俗の会(大湯卓二代表)が主催し、シンポジウム「東北のオシラ神を探る」(於:青森市男女共同参画プラザ・ダガール)を企画した。岩手、宮城、山形、福島各県の民俗学研究会が共催したこのシンポジウムでは、東北各県の研究者を招いて、各県の研究の現状と課題を議論した。筆者はこのシンポジウムで「祭祀者の身体と神像 津軽のオシラサマを起点として」と題する発表を行った。

このシンポジウムの経験から、個々の研究者が「時代差」や「地域差」、あるいは「残存」や「フォークロリズム」、「シンクレティズム」と呼んできたものは、個別的な視座の下では十分に把握できず、個々の動きを「再文脈化」のダイナミズムとして捉えることで、同一の視座の下に現象として捉え直す枠組みを提示できるのではないか、と考えるに至った。

これらの青森県における新たな研究動向と筆者の視角については、山田巖子(巖子)「桑の木に宿る神 - 青森県津軽地方におけるオシラサマ信仰の「現在」 - 」小池淳一編『国立歴史民俗博物館国際研究集会報告書 民俗のなかの植物 - 日韓比較の視点から - 』2011年3月で論じている。

また、民俗の再文脈化の議論の一端は山田巖子(巖子)「マイノリティをめぐる「語彙」と「文脈」 芝正夫と「福子」」(『国立歴史民俗博物館研究報告』165号 2011年2月)を参照されたい。

## 2. 研究の目的

本研究では、具体的な多年の蓄積を持つ、東北の博物館に勤める研究者(科研開始当時は福島県立博物館、遠野市立博物館、リアス・アーク博物館の学芸員)らを中心に各地の研究者と連携しながら、オシラ神の変化を、それが置かれている「文脈の変化」とともに捉え、民俗信仰が新たな文脈を獲得してゆく、「再文脈化」のダイナミズムを捕捉することで、新たな理論的枠組みを構築することを目的とする。

## 3. 研究の方法

- 1 東北の博物館学芸員を中心とした研究協力者と研究会を開き、「再文脈化」をキーワードに、それぞれの地域の調査報告や資料を読み直す。この研究会で、それぞれの地域の、新たな「文脈」化の契機(制度、人物、事件、物質、産業構造の変化など)、「文脈」の生成、併存する「文脈」の

ズレや偏差、などを確認する。また、これらの作業を通して、「地域」把握の再検討、を行う。

- 2 研究会は、オシラ神の行事と合わせた日程を設定し、研究会の翌日に巡見を行い、調査の「場」の確認と共有を行う。
- 3 平成22年度に行った津軽のオシラ神に関わる宗教施設の調査成果をデータベース化し、信仰圏を提示する。
- 4 平成22年度に行った津軽のオシラ神に関わる宗教施設でのアンケート調査の結果を分析する。
- 5 研究会参加者がそれぞれの持つ映像資料を持ち寄り、発表者が分析の視角を示し、その後、合同視聴した後、討議を行う。
- 6 オシラ神が置かれている文脈の動態を示す資料として映像資料を編集し、作品化するための議論も併せて行う。
- 7 映像資料作成に向けて新たな撮影候補地を決め、撮影する。

## 4. 研究成果

- 1 津軽におけるオシラ神信仰の拠点となる宗教施設のデータ入力を完了し信仰圏を明らかにした。発表に際してはプライバシーに配慮し、数字または圏域を地図に示すなどの形で用いる。

このデータは2012年に研究協力者が日本民俗学会での発表に際して、信仰の広がりを示すために地域ごとに数量化して用いた他、研究代表者が2013年の日本昔話学会の招待講演、日本民俗学会の発表の際に、北海道への信仰の広がりを示すために信仰圏を地図に示して用いた。

- 2 2010年度に実施したアンケート調査を集計し、分析を行った。この成果は研究代表者が2013年の日本昔話学会の招待講演と日本民俗学会の発表に「授かり」の時期の資料として用いた。
- 3 本研究の申請後に東日本大震災が起こり、研究者の従来の調査地を巡見することが不可能になる場合が生じた。その際には代替地をさがし、巡見した。また、新たな巡見地で映像資料を作成した。従来の調査地や新たな巡見地についても、震災後の変化について留意した。これらの成果は映像資料に反映されている。
- 4 巡見できなかった調査地の候補のうち福島県のデータについては、調査の過程で東京都在住の在野の研究者から福島県会津地方の調査資料の提供を受けた。  
この提供者は、調査資料の刊行を希望し、自身の長年のオシメイサマ調査のうち1970年代から80年代にかけての手書きと孔版の調査原稿及び写真を研究代表者に託した。この資料をいったんデジタル化し複製版を作成した。
- 5 4の資料提供者である調査者と研究代表者は協議の上、この資料は刊行までには

調査者の加筆訂正が必要であること、プライバシーに対する一層の慎重な配慮が必要であることで合意し、刊行に向けての準備に入った。

6 オシラ神の「再文脈化」を示す映像資料「オシラ神信仰の『現在』」を作成した。従来の文脈からの変化を示す事象は「オシラサマ信仰の諸相」と題し、従来の文脈から大きく離れたものについては「オシラサマ信仰の展開」と題し、二部構成とした。第一部を研究代表者の山田巖子(巖子)と研究分担者の川島秀一が作成し、第二部を研究協力者の前川さおり(遠野市立博物館 学員/遠野文化研究センター調査研究課)が担当した。

7 6の映像資料の解説『オシラサマ信仰の「現在」』を作成した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 9件)

- 1 山田 巖子(巖子) 編「オシラ神資料集 1」『弘前大学人文学部民俗信仰資料叢書』1 2014・3 弘前大学人文学部民俗学研究室
- 2 山田 巖子(巖子) 編『映像解説 オシラサマ信仰の「現在」』2014・3 弘前大学民俗学研究室
- 3 山田 巖子(巖子)「仏教唱導と 口承文化」入間田宣夫・菊地和博編『講座東北の歴史』5巻 2014・2
- 4 川島 秀一「津波と海の信仰」『比較民俗学』50号 比較民俗学会 2013・4
- 5 川島 秀一「海と海難者を祀ること」『歴史民俗資料学研究』18号 神奈川大学大学院 2013・3
- 6 川島 秀一「三陸の海と信仰」日高真吾編『記憶をつなぐ 津波文化と世界遺産』財団法人千里文化財団 2012・9
- 7 川島 秀一「津波と海の民俗」『震災学』1号 東北学院大学 2012・7
- 8 川島 秀一「津波をめぐる生命観と復興」『神奈川評論』72号 神奈川大学広報委員会 2012・7
- 9 川島 秀一「津波石の伝承誌」『東北民俗』46号 東北民俗の会 2012・6

[学会発表](計2件)

- 1 山田 巖子(巖子)「授かるオシラサマと文脈 - 信仰が生起する場をめぐって-」日本民俗学会 2013・10・13 新潟大学
- 2 山田 巖子(巖子)「授かる神々 津軽におけるオシラ神の奇瑞と霊験」日本昔話学会(招待講演)2013・7・6 関西外国語大学

[図書](計 0件)

[産業財産権]  
出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

山田 巖子(巖子)(弘前大学・人文学部・教授)

研究者番号：20344583

(2)研究分担者

川島 秀一(東北大学災害科学国際研究所・特任教授)

研究者番号：30639878